

書道家・美文字トレーナー
杉本 健爾さんに聞く

聞き手 山岡三子さん ●フリーアナウンサー、名古屋短期大学客員教授



すぎもと・けんじ
 久留米大学商学部卒。ふ
 たば書道会師範。大学卒
 業後、企業勤務を経て30
 歳から本格的に書道を始
 め、書道家・武田双雲に
 師事し、師範免許を取得。
 現在は、自身の書道教室
 や早稲田大学エクステン
 ションセンターで指導の
 ほか、ペン字講座や講演
 活動など幅広く活躍中。

テレビで見た武田双雲さんの
 書に感動して、福岡から神奈川へ

山岡 杉本さんは書道家、また美文字トレーナーというお仕事もなさっていらつしやいますが、書の世界にお入りになったきっかけをぜひお教えてください。

杉本 大学の4年間、福岡のCDショップでアルバイトをして、卒業後に正社員になりました。仕事は充実していたのですが、20代の後半になって、自分が一生続けたいものは何だろうと悩み始めたのです。自分には何があるのか、何ができるのかも分かんらず、3年間くらい、もやもやした気持ちを抱えて日々を過ごしていました。

そんな時に、たまたまテレビに書道家の武田双雲さんがご出演なさっているのを拝見したのです。それまで双雲さんのことは全く知らなかったのですが、とにかく「ものすごい字を書く人がいる」と衝撃を受けました。私は小学校3年から5年まで書道

を習いましたが、その後は書道とは無関係でした。

こんなスゴい字を書く人は普段は何を考
えているんだろうと気になって、いろいろ
調べたり、トークライブのイベントに行っ
てみたり。そのあたりから、書道に興味が
わいてきました。それで、双雲さんのよう
な字が書きたい、あなたに書を習いたいの
だという手紙を書いたところ、ご本人から
電話がかかってきたのです。

山岡 えっ、本当ですか。

杉本 はい、手紙には私の電話番号も書い
たのですが、それを見てかけてくださった
のです。知らない番号が表示されたので、
誰だろうと思いついたら、「武田双雲と
申します」と。非常に驚きましたが、「ぜ
ひ、私に書を教えてください」とお願いし
ました。それで、仕事を休んで、神奈川県
の江ノ島の近くにある双雲さんの書道教室
に体験に行くことになりました。
ここで体験した書の世界が面白くて面白

くて。これをとことんやってみたいと思っ
たので、福岡の仕事を辞めて、妻と二人で
引っ越してきました。

書は、頭の中のものが 白い紙の上でいきなり作品になる

山岡 まるでテレビドラマのような展開で
すね。

杉本 まわりの人からは、何を考えている
んだとずいぶん叱られました。

CDショップの仕事は、アーティストが
生み出した一つの作品
を、10000売ったり
100000売ったりす
る。それはそれで楽し
かったのですが、私は
ゼロから一つのものを
生み出すアーティスト
側の仕事をやりたいと
いう思いが、ずっとど
こかにありました。字



がうまいと言われたことはあったので、こ
れを伸ばしたらどうだろうか。やってみよ
うという単純な気持ちで、真つすぐに書の
世界に入っていました。

書道って、何もない白い紙に筆をポンと
置いたら、頭の中にあつたものがいきなり
形になって作品が生まれるんです。それが
とても面白いですね。

山岡 手紙をお読みになった双雲さんがわ
ざわざ電話をかけてきてくださったという
ことは、杉本さんが相当な熱意を込めてお
書きになったのでしょね。もちろん手書
きですよ。

杉本 もちろんです。私が書いたのは、4
5枚くらいだったと思います。こんなに心
を込めて書いたことがあるだろうかという
くらい気合を入れて、朝までひたすら書い
て投函しました。

山岡 体験入学の後は、福岡と神奈川をし
ばらく行ったり来たりしてからお決めに
なったのでしょうか。

杉本健爾さん



杉本 いえ、すぐに仕事を辞めて、とりあえず引越そう、と。当時、私はちようど30歳で、既に結婚していました。妻に話したところ、「あなたが本気なら行こうか」と言ってくれたので、ありがたかったです。**山岡** すてきな奥様ですね。しかし、引越して書道教室に通うようになってから書がお仕事になるまでの間、さまざまにご苦労がありました。ではないでしょうか。**杉本** とりあえず仕事を見つけて、双雲さんの書道教室に月に3回通い、あとは毎日ひたすら書き続けました。最初は全くの初心者なので、書いても書いても先生のよう

な字にならない。この差を埋めるにはどうしたらいいかを常に考えながら書いていました。

3年たつて初等科師範の免許が取れたので、自分のお教室を開き、いろいろな仕事広がっていきました。

仕事をしながら毎日書き続けて、 3年で初等科師範の免許を取得

山岡 双雲さんのご指導は厳しかったでしょうが。

杉本 双雲さんは「楽しくやりましょう」というタイプなので、お教室も和やかな雰囲気でした。その中で、私は先生が書いていらつしやる姿を見るチャンスは逃さず、ひたすら観察していました。また、先生が講演会や本のサイン会で書いていらつしやるところを真横から見ることができて、得るものがとても大きかったですね。こういうときは体をちょっと起こして、腕は下げ、筆の向きはこつちだとか、まるで熱心

なマニアのように見ていました。

山岡 芸は盗むといいますが、まさにそういうことなのですね。

杉本 はい、私は目線がちよつとオタク的なのもかもしれません。ああ、たつぷりと墨を付けているとか、筆を下ろしてグツと深くいったぞとか、この紙のときは多めに墨を落としたりとか。

山岡 紙によつても変えるのですか。

杉本 紙や書く文字に応じて、双雲さんは筆も変えていらつしやいました。そこには何かしら意味があるはずだと思つて、あとで同じような筆を買つて書いてみる。ああ、だからこれを選んだのかと納得する。興味が尽きなくて自分でも持て余すほどで、書道つてこんなに面白いのかと感じました。

山岡 3年で初等科師範の免許をお取りになったというのは、早いほうでしょうか。

杉本 一概には言えませんが、私が所属しているお教室の中では早い方だったようです。私は他の方と比べて、書道を始めるのが

遅かったですし、早く双雲さんのような字を書きたいと思っていたので、どうしたらいいかを常に考えながら走っていました。その後、大人に教える為の師範や仮名やペンの師範免許を取ってからも、双雲さんの書道教室にずっと通っています。

お手本のいいところを 自分のほうに引き寄せる

山岡 どこかで師を越えなくてはいけない、という思い、またはご自身の個性、人との違いを出すといったようなことをお考えでしようか。

杉本 違いを出そうとか他の人の逆を行こうとすると、自分の意思とは違う方向へ行ってしまう可能性があるように思います。自分で選んでいるようで、実は選んでいない。だからそれはあまり気にせず、興味のあるものやワクワクすることに向かってひたすら走り続けられ、個性は勝手に現れてくると考えています。

双雲さんの表現力はすごい。私はどちらかというところ、美文字を教えるとか、師から学んだたくさんさんのことについて分かりやすく伝えるというほうが向いている。いまはそれが面白くて、本を書いたりいろいろな活動をしています。

山岡 杉本さんの本にも、「個性はいろいろあるので、文字の美しさも人それぞれでいい」とあります。

杉本 「上手な字」って、たくさんあると思います。書道的にうまいとか、个性的でうまいとか、かわいくてうまいとか。その人の個性、その人しか出せない色合いというものがあった方がいい。一生懸命に練習してお手本と同じように書いても、ちゃんと個性が出ます。ただ、あまりお手本のほうに寄っていかず、「お手本のこの部分を自分の字に生かそう」といったように、お手本の要素を自分に引き寄せて自分の字を磨いていく。そのほうが素敵ではないかと私は思っています。

山岡 「お手本を引き寄せる」という考え方は、とても興味深いです。

杉本 お手本の、これはねる前のちょっとしたカーブがかっこいいと思ったら、それを自分の字に入れてみたり、筆を返した上がり方とか打ち込みの角度を取り入れたり。私の場合、とても部分的なのです。それとずっとやってきました。

一方、下手な字も興味がありますね。常識的に考えて、ここに点は打たないだろうというところに点を打っていても本人はそれが当たり前だと思っている世界は衝撃的で魅力的です。この感性は私にはないな、



山岡三子さん

と思う。その人の片鱗を見たような気がします。

山岡 下手な字もまさに部分的に見て、そこから学んでいらつしやるのですね。

杉本 下手というのは自分の主観であつて、普通だと思う人もいれば、うまいという人だつていられるかもしれない。下手な字も上手な字も普通の字もたくさんあつて、それを見られることが幸せです。下手を知ると、違う方向にある「うまい」が見えてくるんです。

町中を歩いていると、定食屋さんに手書きのメニューが出ている。中には感動するような字もあつて、ずっと見ていることもあります。また、自然を見てみると得られるものもたくさんあります。木の枝ぶりがいいと思ったら、筆を持った時にそのイメージを思い出して「払い」を書いたり。**山岡** メニューを見ても木を見ても、何もかもが勉強になる。全部、クロスオーバーしていらつしやるのですね。

書の楽しさを生徒さんと共有して みんなで一緒に楽しみたい

山岡 杉本さんは「下手」を排除しないで、「上手」も「下手」も「普通」も包摂しながら教えていらつしやる。生徒さんは勇気づけられて、お喜びになるでしょうね。

杉本 私はあまり「教えている」という感覚がなく、「一緒に書の世界を楽しみましよう」という感じです。もちろん、うまく書きたい人にはそういう書き方を伝えますが、それだけだと面白くない。だから、こう書くのと面白いような気がしますが、どう思いますかとか、私はこういうときにこう書くんですが、あなたはどうかというように、共有したいのです。字って面白いよね、どうしてこんなに個性が出るんだろうねといったように、みんなで楽しみたいですね。**山岡** 書道教室にはいろいろなニーズを持つ生徒さんがいらつしやると思いますが、その人たちと共有しながら楽しむのは、先

生としては難しい作業ではないでしょうか。**杉本** これは違うなと感じた生徒さんは辞めていくでしょうが、それでいいと思います。その人に合った先生が必ずいらつしやるので、探すことが大事ですね。気持ち盛り上がる、こういう書き方もあるんだと学べる、こういう先生もいるということを楽しめる、そんな自分に合うところを選んでいただきたいですね。

ある日、仕事帰りの生徒さんに「疲れていませんか」と聞いたところ、「逆に、ここに来て書くことで落ち着いたり、癒やしになりました」と言われたことがあります。世の中は何事もスピードアップですが、書道は「ゆっくり」の方向という、全く逆のベクトルです。仕事と書道のモードが違うことが、逆によいのでしょうか。

山岡 癒やしになるし、ちよつと座禅のような、自分と向き合うといった効果もあるのかもしれないね。

杉本 きつとあると思います。墨の香りを

かぐだけでも、落ち着きますよね。お教室を欠席した生徒さんが、その月の課題を清書して送ってくださいます。その封を開けた瞬間に墨の香りがふわつと漂って、私はそれだけで癒やされることがありますから。

祖父の形見の硯と墨で 師範試験を受けて合格

山岡 本日お持ちいただいたのは、杉本さんが普段お使いの書道具です。すてきな硯ですね。

杉本 これは本当に大切な硯で、甲州の雨畑硯です。私が小さい頃、祖父の書斎でよく見かけたもので、祖父が亡くなったときに譲り受けました。

山岡 この硯を使うと、やはり違うものではないでしょうか。

杉本 硯には鋒錠（ほうぼう）といって、表面を顕微鏡で見ると細かいざざざざがあります。それが細かければ細かいほど、小さい粒子の墨をすることができます。そう

すると、書いたときに墨が紙に入っていくのです。

紙は木などの繊維が絡まってできていますが、その繊維と繊維の間を墨が抜けていくのにじむのです。墨の粒子が粗いと繊維の間を通り抜けられない。粒子が細かいとスーッと通るので、にじみがとてもきれいに出来ます。この硯で墨をすると、そうなるのです。

山岡 やはり、おじいさまのことを思い出しながら、気持ちを込めて墨をするのでしょうか。

杉本 その墨も、祖父が使っていたものがいまだに残っています。とてもいい墨で、師範試験の時にはこの硯と墨を使いました。「おじいちゃん、力をください」とお願いしながら。

山岡 そういう思いって、書に出るのでしょうか。

杉本 出たと思います。合格したので、祖父のおかげだと感謝しました。



この筆は江戸筆で、東京の亀井正文さんという筆職人の方が作ったものです。捌きも使いやすくて、私はこれが大好きです。

山岡 硯や筆のお話をなさっている杉本さんは、とても生き生きとした表情でいらっしやいます。本当にお好きなんですね。

杉本 毎日、好きなこと、楽しいことしかしていないんです。独立して一人でやろうと思った時に、もう自分が好きなことしかない決めました。それ以外のことは、他に好きな人がいるだろうから、その人にお任せする。自分は、興味があることをワ

クワクしながらやっていく、それに絞ろうと思いました。

山岡 いまはもう、毎日が幸せということですね。ストレスはございませんか。

杉本 ストレスがないのが、逆に大丈夫かなと思うくらいで。たぶんあるのだけれど、気付かないんでしょうね。

山岡 それは、もしかすると、先ほどおっしゃっていた「書の癒し効果」というものも関係してくるのでしょうか。

杉本 それは絶対にあると思います。教室で生徒さんたちが書いている様子や、室内に漂う墨の香りが、私にとっては癒しになっています。

字に興味がわくと文章が気になり、いい文章について考え始める

山岡 桜美林大学で、アメリカからの留学生に書をご指導なさったそうですが、いかがでしたか。

杉本 それぞれの名前を漢字で当ててほし

いという声があったので、私が漢字を英語の名前に当てて書いたら、とても感動してくれました。また、男子学生のダン君は、自分で「暖」という字を当てて使っていると話してくれました。彼らなりに、漢字で遊んでいる。日本のアニメが好きだったり日本の文化に関心のある学生が、書道にも興味を持って体験してくれたということがうれしかったですね。

山岡 日本の大学生は就職活動で手書きの履歴書が必要なので、ペン習字が見直されているようです。杉本さんの本にも、パソコンのキーボードやスマートフォンから入力する時代だからこそ、手書きを見直してほしいとありました。

杉本 字にはその人の人柄や感覚など、いろいろなものが出ると思います。もちろん、それだけで判断するわけではありませんが、エントリーシートは「私はこういう人間です」ということを伝えるものなので、やはり丁寧に書くでしょう。それを雑に書いて



杉本健爾さん(右)と山岡三子さん
(2016年8月1日 小田急ホテル
センチュリーサザンタワーにて)

とりあえず出したとなると、相手のことをあまり考えていないということが伝わってしまいます。

山岡 杉本さんは、美しい字は人生を変えるときまでお書きになっていらつしやいます。
杉本 そう思います。私は人生のいろいろな時に、手紙を書いてきました。それが、自分の気持ちが一番相手に伝わると思っているからです。私が双雲さんに出した手紙もそうですし、妻に宛てた手紙もそうです。字がうまくなくて、ラブレターを書くって、最高じゃないですか。

山岡 最近の若い人はスマートフォンでの

コミュニケーションが主流で、きちんとした文書を書けない人が増えてきていると聞くこともあります。

杉本 まず一つの文字に興味を抱いて、その字をきれいに書きたいと思う。次には、文字を幾つもつなげた文章をきれいに書きたいと思う、書き始めると長い文章を書きたくなるものです。そうすると、文章について考え始める。いい文章って何だろうと思つて、小説や詩集を手を取つてみたり、好きな歌の歌詞を読み込む。相手に伝えるためにはどの言葉を選ぶといいか悩んだりしながら、日本語力やコミュニケーション力が鍛えられて、人生も変わっていくとあります。実際に、私はこれまでもそうやって変わってきましたので。言葉選びつてすごく大事なことですよね。

若い人へ「大人の意見を聞くだけではもったいない。思つ通りに生きる」

山岡 大学での学びは、どういった面で現

在に生きているとお考えですか。

杉本 久留米大学商学部でしたが、経済や流通を学ぶということは世の中の仕組みを学ぶようなもので、自分は社会に対してどのような立場からどのように関わっているかが見えてきます。私は現在、自分で何かを生み出すことによって経済に関わっているし、大学で学んだ会計や簿記の知識は、書道教室の運営に直接役立っていますね。

山岡 最後に大学生をはじめ若い方へのメッセージをいただけますでしょうか。

杉本 そうですね、「大人の意見は、あまり聞かないほうがいい」でしょうか(笑)。語弊があるので本意を察していただければ嬉しいのですが、誰かの意見に依存し過ぎず、自分が思つたように、自由に生きればよいと思います。お手本どおりに生きるって、ある意味では簡単ですが、それでは少し弱い。なぜなら、お手本とする人と自分は違うから。いろいろな人の生き方を見て、じゃあ自分はどう生きるかを模索するのが、た

ぶん一番面白いし強い。ただ、ヒントはたくさんもらつたほうがいいでしょうね。

山岡 書道のお手本から、気に入つた部分を取り入れるのと同じですね。では、杉本さんのこれからの夢を教えてくださいませんか。

杉本 私は、将来の夢をあまり考えたことがないんです。夢を追っている、夢のとおりになつていない自分をととても意識してしまうような気がしますし、夢を追求する思いが強ければ強いほど、かえつて心が暗くなつてしまいかもしれません。私は、いま面白いものとか楽しいお話とか、ただそこに夢中になつて、そうして生きているような気がします。

もちろん、夢があつてそれに向かつて突き進める人もたくさんいると思いますが、必ずしも夢を持たなくても毎日楽しいよ、と言いたいですね。そしてもし目の前にやりたいことが出てきたら、自分の気持ちに素直に従つて動いてほしいなと思います。